

73回生グローバル課題研究・実践報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061868

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



73回生グローバル課題研究・実践報告

数学科 外山 康平

本稿の目的は、令和2年度の2年生「総合的な探究の時間」で取り組んだグローバル課題研究の実践報告を行い、高校生研究が充実するためにどのようなことが重要か、をまとめることである。

今年は、コロナ禍における取り組みであること、またNational Junior College Singapore（以下、NJC）との協働研究を初めて取り組むなど、困難さを伴った実践となり、その1つ1つを克服する際に、何をどのように考え実践してきたか、について、本稿では整理している。

コロナ禍において探究活動を進める上で大切だったことは、Slack、ZOOM、LMSといったオンライン環境の利用である。急激な変化の中でも、オンライン環境を利用することで、生徒たちと多くの双方向の探究活動を進めることができたのは、大きな財産であった。

また、NJCとの協働研究においては、主体的に提案を続けていくこと、合意を得るために複数の案を作ること、外との交渉と同じように学校内の意見を重んじることの3点が重要であった。

キーワード：総合的な探究の時間 協働研究 グローバル課題研究 NJCとの協働研究

1. はじめに

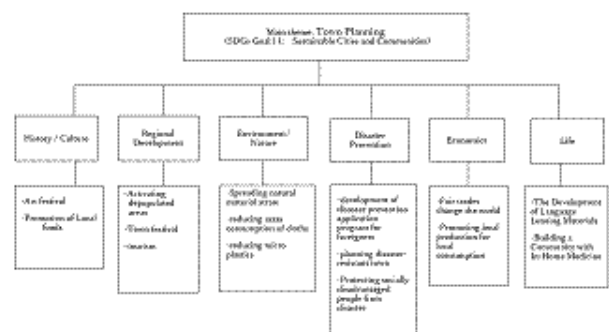
金沢大学附属高校の令和2年度の2年生の「総合的な探究の時間」は、「グローバル課題研究」として、大きなテーマとして「Sustainable City & Communities」とし、個人研究で、一人一人がやりたい研究テーマに取り組んだ。個人研究に取り組むことや一人一人が研究を論文にまとめることは、昨年72回生が取り組んだ形と変わらない。

しかし、立ち上げからコロナ禍でのスタートとなり、前年同様の話はほとんどなく、苦難の道りだった。本稿では、令和2年度の2年生「総合的な探究の時間」で取り組んだグローバル課題研究の実践報告をふまえて、高校生研究が充実するためにどのようなことが重要か、について、主にまとめていく。

2. 2年生グローバル課題研究の立ち上げ

3月中旬に急遽、新型コロナウイルス感染防止のため休校期間に入り、73回生2年グローバル課題研

究は、休校期間中にスタートすることになった。休校に入る直前に、授業をせずに3つのことを行った。①各クラスでSlackを作ったこと、これは休校期間中に、総合など授業も含め生徒たちと連携を密に行うために必要であった。②グローバル課題研究の趣旨を伝えること、ここでは「大きなテーマとしてSustainable City & Communitiesとして、自分の



やりたい研究テーマを提出すること、また、大きなテーマとして次のどれか？歴史文化、地域振興、経済、防災、環境、生活のうちどれか？」という指示を行った。③研究に対する考え方をすべてまとめた

必携を生徒1人1人に与えた。

そこから休校期間中に入り、その後、Slackによって生徒たちからテーマを集めた。それに基づいて6つのゼミを形成し、さらにそれぞれゼミごとにSlackでワークスペースを作った。それによって、ゼミごとに活動することが始まった。具体的には、休校期間中でも調査を行い、研究テーマに対して新たに得られた知見は何か？について、2週間に1度報告し、ゼミ担当の先生からアドバイスを受けるという活動を行っていった。そして、当面の共通目標として、「8月に留学生向けポスターセッションを行うからそこで発表できるように」ということを掲げて活動していった。

スタートするにあたって、まず考えたことは、前年度からの引継ぎ事項もあって、大きく次の3点であった。

①ゼミを作るなら「近いテーマの生徒同士で作ってより議論を活性化するように」作ること、協働研究も認めてもよい、内容を深めあう関係を作りやすい環境を目指そう。

②テーマ決めに対して、2つのことを強調した。

①「金沢から世界へ」、グローバルの意味を特に「共感」と考えた。地域の声を聞いて内容を深めること、その結果「他の国ではどうだろう」と国を超えて考えること。②自分の強みを生かしたオリジナリティのあるテーマを設定すること。自分が深く研究してみたいこと、自分の人脈を活かす研究、自分の生き様が活きるような研究にしよう。

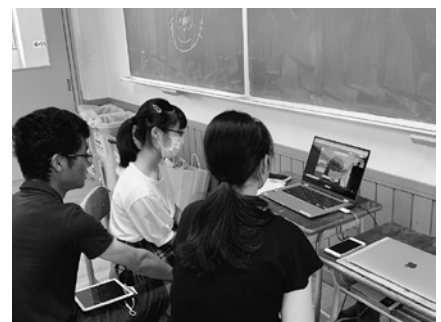
③ゼミごとのやり方を尊重する。総合の全体管理者としてゼミに対しゴールだけ設定すること。逆にプロセスは、ゼミ担当の先生に任せること、裁量権を与えること、そうすることでゼミの先生にも生徒の成長を一緒に考えてもらう、研究に責任をもってもらい、生徒とともに研究にモチベーションをもってもらおうことが大切だと考えた。

2. 8月と12月の留学生発表会

第1タームの目標として、8月の留学生発表会があった。実際に学校が登校開始したのは6月からであったため、4～5月の約2カ月はオンライン上で研究し、6～7月の2カ月は登校しながら研究する形になった。しかし、8月の留学生発表会は「外部からの来校禁止」の状況のまま行う必要があったため、オンラインでの実施を目指すしかなかった。

オンラインでの実施ということで全体をどう設計するか？と考え、1つのZOOMのアカウントで入ってもらい、ブレイクアウトセッションで留学生の数(15ブースほど)に分けて、生徒たちも同じ数だけグループ分けして、生徒と留学生をマッチングさせて1対1で発表とディスカッションを行うこととした。また、留学生発表以外の時間を持て余すのが勿体ないので、その裏で、他ゼミ同士の日本語発表も同時に行うことにした。

第2タームの目標として、12月の留学生発表会を掲げた。8月も12月も上記と同じ設計で行ったが、8月の発表会であがった反省点として、①音声の問題



(ヘッドセットやイヤホンがあった方がいい)、②ポスターよりパワーポイントで発表した方がやりやすい、という反省を活かして、それらを修正した形で12月の発表会を行った。

ゼミ担当の先生や生徒の声でも、以下のような声があり、留学生発表会の価値を感じることができた。概ね、生徒、先生ともに、教育的価値が高い活動だったように感じている。

- ・うまく英語がでてこない、悪戦苦闘して一生懸命英語で伝えようとする生徒たちの姿が輝いてよかった。(教員)
- ・自分の英語がまだまだだなあと痛感した。伝えたくても伝えられなくて悔しかった。(生徒)
- ・金沢大学の留学生の指摘が鋭く、生徒たちにとって得るものが多かった。(教員)
- ・他のゼミ生の研究を聞くことで、勉強になることも多く、自分の今後の研究への示唆を得ることができた。(生徒)

しかし、問題点として、「英語で発表が全然できない生徒がいてその指導もゼミの先生で責任もつ」のが難しかった。実際、多くのゼミでは、内容面を高めることにほとんど時間を使うため、授業時間内で発表の時間を設けることが難しい。今回のケースでは、ある生徒の例でいえば、8月に全く発表できず、12月に対しては、私自身が担任だったため準備から声をかけ、ゼミ担当先生とも協力して何とか発表することができたが、指導がどうあるべきなのか悩むところであった。

3. 今年度のグローバル課題研究の良し悪しと今後の展望

良い点

- ・ゼミ担当者ごとのやり方を尊重し、そのゼミの生徒の発表に責任をもってもらうこと
- ・専門性が近い者が集まることで議論が活性化した
- ・本当に研究したいことを一人一人が研究テーマに設定した。

課題

- ・研究が行き詰まったときに解消できない。
- ・ゼミごとに価値観が違うので、評価の観点が違う。

・先生1人につき持っているテーマの数がバラバラ。多い人は、10テーマ持っている人もいる。

今後の展望として、3学期に論文にまとめる活動をする予定である。また、3月に1年2年探究成果発表会を開催する予定である。これは、分科会形式で行い、それぞれの分科会ごとに外部アドバイザーとして社会人の方に研究を見てもらうことを考えている。そのときに、総合的な探究の時間をやる意義、すなわち、「高校生が主体的に社会課題を自分事としてとらえて、その解決案を大人にぶつける」ことが、シーンとして数多く生まれることを願う。

4. NJCとの協働研究

もともと去年から計画していたNJCとの協働研究の話も、コロナ禍でなくなったものだと思っていたが、5月にNJCから再度連絡があり、幸いにも、再びお互いで考え、計画しあうことになった。

お互いに話し合った結果、今年度は、以下の4つのテーマに取り組むことになった。

N1：新型コロナウイルスが増加する状況下で、コミュニティの需要・要求を支えるように、公衆衛生制度がどう進化すべきか？

N2：新型コロナウイルスによるロックダウン対策は、生徒間の友情にどのような影響を与えたか？

N3：グローバル時代において、郷土食文化をどう保全していくか？



N4：グローバル時代において、伝統文化・伝統芸能をどう保全していくか？

どうやってテーマが決まったか？といえば、こちらのゼミ名（歴史・文化、地域振興、経済、環境、

生活),そして今年度なのでコロナというテーマを追加した7つを提示し、NJC側が合意したのが、環境とコロナであった。その後、具体的なテーマをNJCが上記のように提示して、テーマが決定した。

テレカンは、2ヶ月に1回のタイミングで第1回7月27日、第2回9月11日、第3回11月27日、第4回1月15日の合計4回のテレカンが計画された。

別途、NJCとKUSHで同じSlackのワークスペースを持っており、テキストベースでのやりとりもできる環境になっている。それによって、研究の過程で聞いてみたいこと質疑応答したり、研究途中のファイルのやりとりを行ったりすることができる。

その毎回のテレカンの前には、アジェンダとそれまでの研究結果をパワーポイント資料でまとめる準備を行う。テレカンのときには、お互いの研究発表を行い、それについて生徒同士がディスカッションして、今後の方向性を確認する。テレカン直前期では、これらの準備に追われ、N組は、教員生徒ともに忙しい日々を送ることになる。



R2 11/27 N3グループのテレカンの様子

N組担当の教員として生徒の様子を見てきたところ、感じる意義は以下の通りである。

- ・英語で伝えることができないもどかしさを経験し、さらに英語を学ぶ意識が高まる。本当にレベルが高い英語でのやりとりが経験できる。
- ・視野が広がる。そのテーマにまつわるシンガポールの文化的な背景や地理的背景を理解する必要がある

あるため、異文化を理解するきっかけになる。

- ・研究の中身が深まる。例えば、「伝統食といっても、どういう定義で話を進めるか」、「友情とはどのような定義か」など、言葉一つとっても、どういう意味であるか、どこが共通項なのかをしっかりと定義しなければいけない。そのため、言葉の背景を探り、最も大切な特徴をとらえる研究活動が必要となる。それが、より深く研究内容を考えることにつながる。真の研究力が問われる。

今後の展望はどうなるか?というところ、N組の研究は「最後は、自分の学校内での研究をそれぞれしっかりまとめて発表しあおう、そしてその後に、一緒に協働で共通の研究テーマについてまとめよう。」となっている。最後に協働で扱うテーマは、「それぞれの研究テーマについて、国によって異なる部分はどこか、国を超えて共感できる価値観は何か、高校生が国を超えてできることは何か」ということである。その結果を1つのパワーポイント資料と一緒に作ろう、また一緒に発表する機会をもとう、とも考えている。

NJCとの協働研究を進める上で何が難しいことだったか、といえば、やはり初年度で、0から1を生み出す大変さであった。

この事業は、もともと金沢大学附属高校がWWLでの海外との協働研究をどうするか、を悩んだ結果、NJCに協力依頼した案件である。その背景もあって、NJCに「どうすればいいか」と疑問を持たせてはいけない。「主体的に話をしていくのは、NJCではなく金沢大学附属高校」である。その責任があるので曖昧な思いでやりたいことを述べるだけでは足りない。NJC側の思いは何なのか、NJCの学校の文脈はどのような流れなのか、両方にとって、どこが折衷点なのか、をあらかじめちゃんと設計しておくことが重要であった。それは、具体的に言えば、毎回の交渉事の中で、常に、◎と○と△を準備することであった。つまり、◎は「自分たちにとっての理想」、

○は「その一部だけができる案」、△は「最低限これだけはしたい」という3案を毎回、準備していった。繰り返しになるが、「NJCから、『具体的に何がしたいのか？これはどういう意味か？何をしたらいいか？』などと質問されてはいけない、より具体的に、より明確に、このプログラムの構想をリードして提案し続けなければいけない、その上で、NJCと合意形成をしていこう。」と強い信念をもって取り組んでいた。

しかも、それを学校内の先生方とも話しながら実現していかなければいけない。学校内の先生を無視しては、良いプログラムにならない。同じように生徒たちを大切に考えている多くの先生方が良いと思わなければ、生徒にとって本当に良いものにはならない。これは「SGHで、一部の先生だけでプログラムが展開された結果、それ以外の先生が納得しないまま歩み、全員が一つになれなかった」という学校としての苦い経験があって、それを繰り返してはいけないと強く感じていたからである。独断にならないよう、「早く資料を作って全体に共有すること」を意識していたし、「考えを多くの人に相談しながらやっていこう、他の人の意見も活かして作っていこう」と意識的に取り組んでいた。とはいえ、今年度100%それができたとは思わないが、70%くらいで達成できたように感じている。

総じて、このNJCの協働研究は、「主体的な姿勢で取り組む、待ちの姿勢ではいけない」が、「安易な結論にせず、多くの人の考えを聞き、皆にとって納得いく結論を目指す」、その両方を同時に目指すことが最も大切であった。WWLのプログラムを「本当に意味のあるプログラムにする」とは、上記のことを満たすことが重要である。

しかし、それは大変なことである。今後それを克服していくためには、やはり今年のように、管理機関である金沢大学と協働していくことが最も大切なことだと考える。金沢大学、特にWWL海外コーディ

ネーターである東田さんの協力がなければ、今の在り方は生まれなかった。

金沢大学と協働しながら、多くの先生方の納得を大切すること。このように内と外の考え方を同時に大切にして、高度なグローバル教育を求めていく姿勢がWWLで本当に残していくべき価値観であるように思っている。

主な参考文献

- 1) 宮崎嵩啓「地域活性化プロジェクト・実践報告」(金沢大学附属高校『高校教育研究』第71号, 2019年3月)。
- 2) 室谷洋樹「地理総合におけるカリキュラムの構想とその課題」(金沢大学附属高校『高校教育研究』第71号, 2019年3月)。